
短編集

霜月 雪

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編集

【Nコード】

N1828U

【作者名】

霜月 雪

【あらすじ】

この小説は『霜月 雪』のかいている小説、『煌く想いと 咲いて散る花と』の他、『神子シリーズ』等の番外編を投稿していったりするものです。

超・不定期更新です。

祝福 (煌く想いと 咲いて散る花と) (前書き)

『煌く想いと 咲いて散る花と』の番外編です。
本編その数週間後？の話。

祝福（煌く想いと 咲いて散る花と）

地面に積もった雪を、少年はただ見つめていた。雪を被りながらも咲く葉牡丹はばたんを凝視する。

濃めの茶髪に、同じ色彩を宿す瞳。顔立ちはどこか少年というより少女を思わせるものだった。

「煌こっく」

名前を呼ばれて少年は顔を上げた。前にいるのは案の定、幼なじみの少女だった。

「晶あき……」

「珍しいわね。寝坊せずに家の前で待ってるなんてからかいの籠もった言葉に、煌は顔を引きつらせる。

「まるで俺が毎日寝坊してるふうに言うなよな！」

「あら？実際そうじゃない」

「寝坊しない日もあるだろ！？」

「一週間……厭、二週間に一回ぐらいね」

辛辣な言葉に、煌は言葉を詰まらせた。少女は呆れた顔をする。

煌と晶は、つい最近付き合いだしたカップルだ。付き合うことになっても、二人のお互いの扱いはまったく言っていていいほど変わっていない。

「ほら、さつさと行くぞ！由里ゆりが待ってる」

由里、とは一つ下の少女のことだ。そして煌、晶、由里にはとある共通の力がある。

——『霊が見える』、のだ。

煌と晶は血筋。由里はごく僅かだが、まれにある日を境に見える者もいるらしい。

「あ、先輩！」

待ち合わせの場所についた二人に気づき、由里は顔を上げた。由里の近くに、突如少女が現れる。少し癖のある髪が揺れた。

『おはよう。今日は早いね』

嬉しそうに二人の近くに行く少女に、晶は微笑みかけた。

「おはよう、美咲^{みさき}。そうなのよ。珍しく煌が寝坊しなくて……」

「寝坊の話はもういい！」

顔を顰めて言う煌に、晶と由里と美咲は思わず吹き出す。

「まあまあ、はやくリサたちの所に行きましょう？先輩」

由里は笑いをかみ殺しながら、二人を促す。煌はまだ不満があるらしいが、それを無視して足を進めた。

「それじゃあ、またね。由里」

玄関前で晶と煌は由里に手を振る。由里も手を振り替えし、お互い背を向けた。

煌と晶はなぜか毎年同じクラスだ。名字もい行とさ行のため、初めは隣になることが多い。ここまでくると腐れ縁の度を通り越しているのではないだろうか。

「おつはようー！煌、佐々木^{ささき}！」

朝っぱらから高いテンションであいさつをしてきた親友に、煌は鬱陶しそうに眉を寄せた。

「はよ。朝から元気だなあ……一樹^{いつき}」

「ふ……この俺から元気をとってしまったら、なにも残らないだろうが」

「確かにな」

「確かにね」

「否定してっ！」

悲痛な声で叫ぶ一樹に、煌と晶は呆れた視線を寄こす。

「じゃあ言っなよ……」

「晶、煌君、おはよう」

後ろから声をかけられ、煌と晶は同時に振り返った。そこには晶の親友、美沙^{みさ}がいた。

「おはよう」

「おはよー、美沙」

一樹と美沙は一年の頃から付き合っているお似合いカップルだ。同時に煌と晶の親友でもあり、この四人は大抵いつも一緒である。

「一緒に登校？」

「そうー。そういうあんたらも？」

一樹はにやにや、と下品な笑いを浮かべて煌と晶を見た。煌の顔が引きつる。

「なんだてめー。その顔は」

「いやあ？ただようやくくつついたお二人をちよつとつついてみただけ……て！拳を振りかぶるな！しかも無言でっ！」

後半は懇願になっている。美沙と晶はもはや慣れた光景なので、無視して先に教室へと進んでいった。

教室につき、お互い自分の席に座る。美沙の席の斜め後ろが晶のため、普通に話せる。

他愛のない話をしていると、教室のドアが勢いよく開かれた。

「あ……晶……お前、なんで先いくんだよっ」

「美沙も……っ」

開けたのは煌と一樹だった。言葉を向けられている晶と美沙は平然と口を開いた。

「なんでって……、あんたたち二人が喧嘩してたから。置いてきただけだけど？」

「別にいいじゃない？日常よ。日常」

二人とも爽やかな笑顔でそう言つてのける。煌と一樹は目を見開き、ため息をついた。

「それも、そうだな……」

「さ、帰るか」

鞆を担ぎ直し、煌は晶を振り返つた。

「げえ……降つてきやがつた！」

窓を見上げ、煌は呻く。晶は苦笑を漏らした。

「本当だ……傘もつてきておいてよかつたわね」

確かに、と煌は笑う。

二人は校門をでて、家へと帰る道を歩いた。間に会話はなない。なぜか、なにも話せなかった。煌は晶に歩調を合わせているため、自然と並んで歩く形となる。

「さむ……」

晶が小さく呟いた。言つつもりはなかったが、口に出してしまったらしい。驚いて、軽く目を丸くする。

「大丈夫か？」

煌が晶を見て、問うた。晶は慌てて首を縦に振る。

「大丈夫、大丈夫！ただ……すこし、寒いなあと」

思つただけで、という言葉は音にならなかった。煌が晶の手を握つたのだ。

「へ？」

思わず自分でも呆れるような、気の抜けた声を出してしまった。

煌は構わず晶の手を握つたまま、口を開く。

「こうしてりゃあ、少しは暖かいだろ」

さて、急いで家帰るか、と言って笑う煌に、晶は呆れた顔をしてしまった。

しかし、嬉しさもこみ上げてくる。

「そうね」

結局笑い返し、二人は帰り道を急いだ。

音もなく降る雪が、葉牡丹に舞い落ちる。

祝福（煌く想いと 咲いて散る花と）（後書き）

『葉牡丹』

……アブラナ科の一年草。観賞期は12～3月。12月13日の誕生花。

花言葉…『祝福・利益』

サブタイトルはそのまま花言葉からいただきました。

夢を見た（神子シリーズ）

夢を、見た。

少女は勢いよく上半身を起こした。

荒い呼吸を何度か繰り返し、胸元を手で押さえる。目を硬く瞑って、少女――レイは呼吸を整えた。

窓から見える外はまだ薄暗い。レイが起きるには早い時間だ。

それでも、また寝ようとは思えなかった。

ゆっくりと瞼を開けて、レイは祈るように両手をくむ。長い金の髪が頬にかかった。美しい銀の瞳は、今にも泣きそうに潤んでいる。

何分かそうしているうちに、落ち着いたのか、レイはようやく寝台からおりた。足にまとわりつく布が鬱陶しい。

神子は、衣服を整えてくれる神官以外、肌を見せてはいけない。そのためレイの服はいつも、肌を隠すため裾や袖の長いものばかりだ。いつもはそこまで気にしないのだが、今日は違った。汗で肌にまとわりつく服が気持ち悪い。

ため息をついて、レイは寝室から出る。冷たい風が頬を掠めた。汗をかいた後なので、ひんやりとしていて気持ちいい。

「レイ様っ!？」

困惑したような声が響いた。レイは声のした方を振り向く。

そこには目を見開いている神官、ミオがいた。

「ミオ……」

まさかもう起きているとは思わず、レイは掠れた声で名を呼ぶ。ミオは呆然としていたが、やがて慌てた様子でレイのほうへ駆け寄った。

「レイ様！まだ起きるには早すぎます！……どうしたのですか？」

いつもと違うレイの様子に気づき、ミオは怪訝な顔をする。レイは無理につくった笑みを浮かべて、こたえた。

「大丈夫よ。なんでもないわ。……ただ、すこし早く目が覚めてしまっただけなの」

「嘘いわないでください」

レイの言葉に、ミオは眉間にしわを寄せる。怒ったように言葉を続けた。

「どうしたんですか？顔色が真っ青です。それに……汗も随分かいてらっしゃるし……」

心配げに見つめるミオの視線に、レイは言葉を詰まらせる。俯いて、唇を噛みしめた。

「……ただ、夢見が悪かっただけよ。本当に。……大丈夫だから」

「大丈夫、て顔してません」

ミオは眉間に皺を寄せつつ、唸る。そして、とりあえず、とレイの背に手を回した。

「湯殿ゆどのに行きましょう。服も、着替えないと行けませんし」

そうね、とレイは明るい声で言う。しかし瞳は不安そうに揺れていた。

「ふう……」

レイは庭に出ていた。

空はもうだいぶ明るい。風に遊ばれている金の髪を弄もてあそびながら、レイはとある人物を待っていた。

目を閉じると、夢を思い出す。

掴んだと思った温もりが一瞬でなくなる、恐ろしい夢。

レイは慌てて顔を上げた。思い出したくないことほど、脳裏に焼き付いているものだ。

（遅いな……）

レイは門のほうを見て、悲しげな顔をする。

今日は午前に行く、と昨日彼は言って帰って行ったのだ。だいたい午前にくる、と言っていたら、もうそろそろくる時間帯のはずなのだが。

「あ……………」

門が重い音を立てて開く。思わず立ち上がって、レイは目を丸くした。

「レイ！」

門からこちらへ駆けてくる青年に、レイは同じく駆け寄る。

「セキリ！」

漆黒の髪に、翡翠の瞳を持つ青年。

騎士団の制服に身を包み、セキリはレイに微笑んだ。

「おはよう。……………どうした？」

いつもと様子の違うレイに、セキリは小首を傾げる。いつもだったら微笑み返してくれるのだが、今日は俯いたまま、彼の袖を強く握りしめていた。

「セキリ……………」

顔を上げたレイの瞳は揺れていて、目尻に涙がたまっている。セキリは慌てた。

「どうした！？」

レイの両肩を掴み、セキリは目線を合わせる。レイは泣きながら、セキリに抱きついた。

「怖い夢？」

セキリはレイの言葉を復唱した。レイは頷く。涙は止まったが、まだ目が赤かった。

二人はいつもの木の幹の下にいる。

突然泣き出したレイをあやしなから、ここに移動したのだ。

「本当に……怖かったの……」

思い出したのか、レイはまた目を潤ませる。セキリはレイの頭を優しく撫でた。

「大丈夫、大丈夫」

励ますように笑って、セキリは先を促す。

「どういう夢？」

レイは悩むように目を伏せていたが、顔を上げた。

「セキリが、消えてしまう夢……」

予想外の言葉に、セキリは目を丸くする。

「手を握ったら、その瞬間……」

どんなに名を呼んでも、こたえてくれる声などなかった。

怖くて、恐ろしくて、悲しくて。

そんな時に目が覚めたのだ。

「不安だったの……だから……ごめんなさい」

セキリに会うまで不安で押しつぶされるようだった。もし、夢のようになってしまったら、と。

話を黙って聞いていたセキリは、話が終わると、微笑んだ。

そして、レイの手を握る。

「ほら、消えないよ」

「……っ」

驚きに目を見開いて、レイはセキリを見た。

「大丈夫だよ。もうそんな夢みない」

セキリは気にせず続ける。

「傍にいるよ」

ずっと。ずっと。
だから、大丈夫。

そう言って笑うセキリに、レイは安堵の笑みを浮かべた。

夢を見た
(神子シリーズ)
(後書き)

幸せな日常（神子シリーズ）

太い木の幹によしかかっている2つの影があつた。

そのうち1人は、日光に照らされ輝く金の髪をした、20代前半ぐらいの女性。もう1人は、闇を切り取ったかのような漆黒の髪をした、4歳ぐらいの少女だった。少女のほうは女性の膝の上に頭をのせ、心地よさそうに眠っている。女性はそれを愛おしげに見つめ、少女の頭を撫でていた。

「……んー……」

ふいに、少女の瞼が震えた。ゆっくりと目が開かれる。その瞳は銀を宿していた。

「あれ……?」

起きあがり、少女は瞬きを繰り返し、小首を傾げる。

「おはよう、セレナ」

女性——レイは笑いながら、少女の頭を撫でた。少女、セレナはようやく自分の状況がわかり、目を丸くする。

「とうさまは!？」

セレナは勢いよく立ち、周りを見回した。しかし、探している人物はいない。

悲しそうに目を伏せて、セレナは座り込んだ。

レイは苦笑を浮かべ、セレナを抱き上げる。

「今日、父様はいつもより少し遅く帰ってくるのよ。大丈夫、あと少しでくるわ」

安心させるように、レイは微笑んだ。すると、セレナは嬉しそうに頬を紅潮させる。

「ほんとうっ!？」

「本当、本当。母様を信じなさい」

そう言っていると、セレナは安心したように笑った。レイもつられて笑い、セレナをおろす。

その時、門の開く音が響いた。セレナは勢いよく顔をあげ、期待に満ちた顔をして門を凝視する。

門からこちらに入ってきた人物を見つけて、セレナはそれに駆け寄った。

「とうさまっ！おかえりなさいっ」

入ってきたのは、男だった。20代後半くらいの男は漆黒の髪に、翡翠の目を驚きで見開いている。

「セレナ……」

初めは驚いたが、次第にその顔は笑みに変わった。愛娘を抱き上げ、笑いかける。

「早起きだな、セレナ！偉いぞ！」

セレナは褒められ、嬉しそうに笑う。

「おかえりなさい、セキリ」

男——セキリは声のしたほうを見て、笑った。

「ただいま！レイ」

何年たっても変わらない笑顔に、レイは微笑を漏らす。

「いつもセレナが眠っているときにあなたが帰ってくるから、今日はお出迎えするんだー！って、セレナ昨日から言ってたの」

「そうだったのか……ありがとう、セレナ！」

父様嬉しい！とセキリはセレナに頬ずりする。セレナは楽しそうに笑った。

「レイ様！セレナ様！そんな格好では風邪をひかれます！」

ふいに、後ろから声がした。3人同時に振り返ると、そこにはミオが呆れた様子でこちらに駆け寄ってくるところだった。

「あら、ごめんなさい、ミオ。でも大丈夫よ。厚着してるから」

「そうですね？それならいいんですが……ってセキリ様、帰ってきてたんですか？お帰りなさいませ」

「……………俺の扱い酷くない？」

ミオは今気づいたのか、セキリを見て目を丸くしている。

セキリはシヨックだったようで、悲しそうに眉を寄せた。対するミオは平然とした顔で口を開く。

「そんなことありませんよ。けっして」

「……本当かなあ……」

嘘泣きをしながらセキリはレイに泣きつくようにする。セレナはレイに抱きかかえられていた。

「本当ですよ！……ほら、3人共神殿に入ってください。レイ様もセレナ様も、朝ご飯まだなんですから。もう用意してありますよ」

「やったあ！」

ミオの言葉に、セレナはレイの腕から抜け出して、駆け出す。その様子を見届け、レイとセキリとミオは吹き出した。

「そんなに腹減ってたんだ……」

先に食べててもよかったのに、とセキリは笑う。レイは同じく笑いながら言った。

「一緒に食べたかったのよ。さあ、早くいかないと、セレナがまってるわ」

レイの言葉にセキリは頷く。

幸せそうに笑いあう2人の後ろで、ミオもまた、笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1828u/>

短編集

2011年10月7日08時24分発行